

2001年3月31日発行



Web版

CONTENTS

- 卓上のカステラ 谷川健一
- ふるさとの裏山 南木佳士
- 人浚い 萩原葉子
- 拓次とボードレール 飯島耕一
- 宮崎の若山牧水賞 伊藤一彦
- 「世界俳句フェスティバル2000」出展記

田口信孝

群馬県立
土屋文明記念文学館

文学館通信

土屋文明記念文学館報

2001年3月31日

発行／土屋文明記念文学館

〒370-3533 群馬郡群馬町保渡田 2000

電話 027-373-7721 FAX 027-373-7725

Vol 5

卓上のカステラ

谷川 健一



私は土屋文明の素っ気なさが好きだ。この素っ気なさは現代短歌ではむしろごく少数に属し、それだけでも値打ちがある。しかし文明の歌に心ひかれるのは、私の生国が熊本であるせいもあると思う。今も熊本市に残る熊本城の石垣は私の少年時代、日頃見馴れた風景であったが、雄大な石組みの壁がそそり立っていて、取りつくしまもない。これは実戦用に作られたもので、江戸時代中期の、女性的な、飾り気の多い観賞用の城とは趣を異にしている。明治十年の西南役のとき、西郷隆盛のひきいる薩摩軍は、鎧袖一触とばかりに怒濤のように押しよせたが、谷干城の守る熊本城は、薩摩を寄せつけず、籠城を耐えぬいた。文明の短歌によせる私の親近感にはそれを連想させる素っ気なさがある。それは遡れば東歌の真率さとひびき合うものがある。熊本の精神風土はどこか荒涼としている。博多っ子のような底抜けの明るさもなく、また薩摩っ婆のような夜郎自大（西南役を見よ）でもなく、いつも半透明な様相をしている。昔から、「肥後の鋏形」と呼ばれて、誰もが兜をかぶった侍大将になりたがり、群れることをいさぎよし

としない。私が若い頃に読んだから記憶もおぼろげだが、たしか萩原朔太郎か萩原恭次郎か文章で群馬（上州）と熊本（肥後）とに共通した索漠とした風土の共通性を述べているのを見て、納得したことがある。朔太郎の上州の詩の荒涼とした風景を文学少年の私は知っていた。両方とも、それだけ他に誇ることのできる見るべき生活文化がないということでもある。熊本の食文化の代表といえは、馬刺と芥子蓮根である。芥子蓮根の実体をまだ知らぬ読者のために、試みに広辞苑を開いて説明すると、「ゆでた蓮根の穴に、溶き芥子と味噌を合わせたものを詰め、小麦粉に黄粉を混ぜた衣をつけて揚げた食品。熊本の代表的郷土料理」とある。大してうまくもないものである。熊本の名物とは聞かれて、馬刺と芥子蓮根と答えるとき、いつも情けなくなる、その気持ちに悟られまいと無表情を装うだけ尚更そうだ。群馬は蒟蒻だそうであるが。

文明記念館を訪れたとき、文明の書齋の内部が再現されていて、卓子の上にカステラの皿が置いてあった。カステラは西の国の長崎の名物で、私が幼少の頃、（大正末から昭和初期にかけて）故郷水俣の上流の家に呼ばれると、きまつてカステラを出された記憶がある。水俣は鹿児島との県境にある小さな町であるが、長崎文化圏の南の端に位置していた。水俣に鹿児島本線が開通したのは昭和二年のことで、それまでは不知火海（八代海）と有明海の内海を航行する沿岸航路の小汽船で、熊本市や長崎市に出かけていた。花嫁衣装をととのえるのに、第一級のものには長崎市に、第二級のものには熊本市に、汽船で出向いて買い求めた。父や母に連れられて知り合いの家に行くとき出される

カステラには、田舎町にはめずらしい上品で、異国の味と香りがあった。筑後柳川を故郷に持つ白秋の詩にもカステラが出てくる。あの卵色と焦茶色の取りあわせが何ともいえない。

カステラはスペインのカステイリアで作られた菓子で、オランダ人が長崎に伝えたものである（広辞苑）。昨年訪れた記念館で、西国の菓子であるカステラを文明が愛好したことを知って、幼年の頃の思い出がよみがえった。それでも文明は文明堂のカステラでなく、福砂屋の製品を取り寄せたのだという。自分の名前と同じであるのをイヤがっていたのか。謹厳な歌人が、取りつく島もないような顔で、カステラに人生のしあわせのひとときを見出していた様子が目に浮かんでくる。

（たにがわけいち・民俗学者）



ふるさとの裏山

南木佳士



生まれてから中学二年になる春に東京に転出するまで、孀恋村大字三原で育った。ここはまぎれもなく私のふるさとなのだ。昭和五十六年二月の寒い朝、三歳のときに母に死なれた私を育ててくれた祖母が逝った時点を境に足を運ぶ回数はいまつきり減った。

昭和五十二年に東北の医学校を卒業し、ためらうことなく信州の佐久平にある総合病院の研修医になったのは、そこがふるさとにいちばん近い研修指定病院であり、世話になった祖母のそばにいてやりたかったゆえであった。そのころ、帰省するたびに祖母は村の親戚関係の話をしきりにしかけてきたのだが、こちらは新しい環境になじむのに精一杯だったのと、医学生時代の予想に反して、医者という仕事さつそうと白衣をひるがえしつつ病院の廊下を闊歩するかっこいいものではなく、実は人の死を直視せねばならない過酷な激務なのだ。と気づき始めていたので、耳を傾ける精神的な余裕がなかった。

いま想えば、老いて死を予感していた祖母は、ひ弱な孫が村で不義理をそしらぬように懸命に血縁の序列を教えこもうとしていたのだろう。あのとき祖母が語ってくれていたことをノートに託しておけば、以後の冠婚葬祭にどのくらい役立つかと、いまでも後悔している。

祖母の骨を裏山の墓地に埋葬し終えてあたりを見回すと、幼いころから慣れ親しんだふるさとの山に囲まれた景色が妙によそよそしく感じられた。色彩も、冬であるのを差し引いても明らかに色が褪せてしまっていた。

ああ、私はこの土地の根を失ったのだ。そのときは言葉にできなかったのだが、あとになってみると、あのとき私はこういう慨嘆を胸の内ですぐやっていたのだろう。それが証拠に、その年の七月、私は志願してカンボジア難民救済日本医療チームに参加し、戦乱やまぬタイ・カンボジア国境地帯に出かけて行った。もし祖母が生きていたら、彼女によけいな心配をかける行動は厳に慎んでいたはずだ。

以後、ふるさとは親しくしていた方々の葬儀のときのみに帰る。二年前には生家のとりの幸吉さんが八十九歳で天寿をまっとうされた。幸吉さんはひょうきんな人で、秋のお祭りのときなどは必ず自分で工夫した仮装をして子供たちの担ぐ神輿のうしろを大うちわを振りながら付いてきてくれた。幸吉さんがいないと祭りが盛り上がらないのをよく知っていた子供たちは、彼の郵

便局の勤めが終わるまで、他の集落の神輿をやり過ぎしながら出発を待っていたものだった。

また、元旦の早朝に裏山の神社に登ると、社務所には幸吉さんたち長老が控えていて、囲炉裏にかけた大鍋から甘酒をふるまってくれた。

幸吉さんの葬儀の日、裏山の墓地で、ふるさとが懐かしいのは風景そのものではなく、そこで共に生きてきた人たちの感と深くした。祖母のいない生家、幸吉さんのいない神社はもう私をひきつけないのだ。

私は山村を舞台にした小説を多く書いていますから、読者の方々はそれが私のふるさとの風景だと思っておられるようだが、違う。信州に住んでもう二十四年になるので、山村の風情はほとんど信州の山里のイメージで描いている。私の印象では群馬よりも信州の方が山が深く、奥の方まで人が住んでいるので、古い集落が多く残っている。だから、山の村の雰囲気は信州のものを用いている。ただ、登場する人物にはどうしても私の心身に刷り込まれている群馬の人々のふるまい方の色を塗ってしまう。すると、小説のなかでその人物が活きいきと動き出すのだ。

ふるさとの裏山に眠っている懐かしい人たちが私に書かせている。そんな気分になったときは時間の経つのを忘れる。私は書くことでかろうじてふるさととつながっている。

(なぎけいし・作家)

人浚い

萩原葉子



大森馬込村に住んだ子供の頃「人浚い」がいた。今日のように大事件になるのでなく半日か一晩で帰してくれるものだった。平和で、大人達の話題が無いので楽しんでいられるようにも聞えた。道路に面し木造二階の小さな借家は親友の犀星が捜してくれたそうだ。妹と四人、海岸近くの鎌倉に一年住んで引越したのだった。大正十四年の冬で、森と繁った樹木、畑が一面でその向うに広い原っぱがあった。

翌春、入学した私は、隣りの家の子供と一緒に、ランドセルを背負い「人浚いに浚われぬように」と、親に言われて家を出た。家の前は小石ごろごろの道で、葱畑と大根畑の向うの小学校は昼間でも暗く人の姿は無いのである。畑には蓋の無い肥溜があった。

「人浚いってどんな小父さん？」
「怖い顔しているの？」等と、恐いに興味もあった。学校でも注意され当時の「気をつける」とは、人浚いと自転車だった。車やバイクは無く、人力車と馬が砂利道を走った。

束の間の平和は去り、人浚いは子供でなく父と母を浚った。置き去りの妹と私はハシカ、水疱瘡、百日咳と病気続きで親のいない家に放置された。たまに母がいると、大学生が来て二人は寄り添い「恋って苦しい。死にたい」と、言った。病気の姉妹は家の前を歩く深夜の下駄の音が、母であれば父であればと、犬のように耳を敲て、待った。長旅から父が帰り妹の高熱に驚ろき医者呼んだが、手遅れだった。脳膜炎をこじらせ、命はあっても不具の身となったのだった。手のかかる子に母は、「人浚いに浚われた方が良いのに」と、赤く塗った唇で、笑った。

妹が人浚いに浚われたのは、熱が下り間もなくだった。私が学校から帰ると、相変わらず家には母も父もない。それに妹もない。

私は、葱畑、大根畑、肥溜、野原と捜したが、妹の姿は無かった。辺りは足元も見えない闇である。高熱の後遺症で智恵遅れになってしまった妹は、四歳でもまだおむつだった。

母は、毎日どこへ行くのか？ご飯に醤油かけて食べるのは良い方で、お櫃の中は空っぽ、縄帳の中の青カビの菓子と腐った魚を空腹で食べてしまい中毒でひどいめに合った。妹はお腹が空いてよちよち歩きで、どこかへ行ったのだろう。

隣りの家に行ってみると、妹がお腹空かし泣いて来たので、ご飯食べさせ

て家へ帰してくれたと、分った。「お母さんはどこへ行くの？こんな子供残して」と、隣りの小母さんは、怒って言った。妹は母を捜しに行ったのである。小母さんと一緒にフクロウの鳴く森の中や、肥溜の中まで捜したが、妹の姿は見つからなかった。

「遠い国へ浚われたのだ」と、私は思った。そう思うと妹が可哀想で、涙が出た。病気の後、更に赤ん坊に戻ったように、妹は眼を離せなくなった。まだゴムのおしゃぶりを啜え「お父さまあ」「お母さまあ」と、泣き叫び、しまいには私を敲いたり、なぐったりする、乱暴な子にもなったのである。

次の日、学校から帰って来ると妹が家にいた。父の話して、おまわりさんが抱いて来てくれたと分った。首から住所と名前を書いた札を下げるのが、人浚いの予防だったので妹も下げていたのだった。

家近くの原っぱで、浚われ連れて行かれた次の日、同じ場所に放られていたと、分った。



幸い、怪我は無く、無事だったが、前途の闇を暗示されたような出来事だった。

今日思うと当時の人浚いと呼ばれた男は、目的は何なのか。刃物持ったり殺したりの今日に比べ罪は軽いが、それなりの刑はあったのか。病氣の子を置き去って父を浚い、母を浚ったのは何なのか。後に父の足取りは分ったが、母を浚った大学生は一体誰だったのか。別れて二十五年目に再会した母は、遂に真実を明かさなかった。

(はぎわらようこ・作家)

拓次とボードレール



飯島耕一

昨春、『群馬文学全集』第六巻、大手拓次篇の編集・解説の仕事にとりかかって、早いものでもう一年以上の時が経つ。夏には磯部温泉にも行った。第六巻が刊行されたのは去年の十月である。拓次篇の準備を始めたその頃から、わたしは、もう一方で、暇があると個人的な遊びとして漢詩

や和歌・俳諧を含む『江戸の詩史年表』を作るようになっていた。そのうちに明治期の詩の歴史にも触れることになり、だんだんに大正初めにまで記述は進むようになった。

この『詩史年表』に目下は凝っているので、それと関連しての大手拓次をめぐって何か書いてみることにしよう。

大手拓次は多くの西欧詩人の詩の翻訳をしているが、わたしはあえてこの全集ではボードレールの詩の訳のみを二十四篇収録した。二十四篇も並べるとちよつとした壯観である。それにしてもあれほどフランスの詩人、ボードレールに心酔した詩人が、どうしてあの時期に生まれたのだろうか。ここでは一々引用はしないが、評論・日記にあっても、拓次は象徴詩や、詩集『悪の華』や、ボードレールへの憧憬を語り続けて倦むことがない。

『全集』の林桂編の年譜を見ると、拓次の生まれたのは一八八七年、將軍徳川慶喜が大政奉還をしてから、ちよつと二〇年後のことだった。のみならず、右の大政奉遷の年は、パリで詩人ボードレールが没した年でもあった。

わたしの作りつつある『詩史年表』によれば、大政奉遷とボードレールの死の年である一八六七年から、拓次の生まれるまでの二〇年間に、どのような詩的事件が起こっているか？

少年詩人ランボーが北仏の中都市シャルルヴィルで詩を書き始めたのは明治になってすぐの時期である。このランボーが最後の詩集『イリュミナシオン』を書き上げたと思われるのは一八七四年で、同じ年、日本ではとくによく知られる詩人ヴェルレーヌは、詩集『言葉なき恋歌』を世に問う

ていた。また旧幕臣の文人成島柳北は、『柳橋新誌』を刊行、またフランス語をやがて学ぶ拓次にはきわめて関連が深いこととして、中江兆民が仏蘭西^{フランス}学舎(仏学塾)を開いていた。

七九年には、それより六年前、キリスト教に入信した植村正久が、日本の詩の未来について書簡で論じている。八四年にはいち早く、パリやロンドンに遊んだ柳北が没し、洋画家の黒田清輝がフランスに渡る。こうした拓次誕生以前のいろいろな出来事こそが、ひそかに拓次という詩人の出現を準備していたのではあるまいか。

ついにフランスには行けなかった萩原朔太郎が前橋に生まれたのが一八八六年、その翌年、拓次は磯部に生まれている。それから二十三年目の一九一〇年、のちの『藍色の墓』の詩人は、念願のボードレール詩集『悪の華』の原書を手に入れ、やがて「なつかしいひとりの友ポオドレエルよ」と詩の中で呼びかけることになる。「わたしの魂にあやしい美酒をつぐポオドレエルよ、／おまへのうしろには醜い罪の乳房が鳴り、／暗緑色の乳液がながれてゐる」。「夜ねむるとき Les Fleurs du 忌」はわたしの枕べにあり、／ひるは香炉のやうに机のすみにおかれてある」。Les fleurs d'umai というのは『悪の華』ということだ。あるいは「悪の花々」、「病める花々」である。

拓次がこの詩集の原書を手に入れて歓喜した年、フランスから帰国したばかりの荷風は小説『冷笑』を発表していた。荷風の『ふらんす物語』は朔太郎や拓次をつよく刺激したに相違ない。

年譜によると、拓次が九歳の時、母の「のぶ」がまだ三十三の若さで病没する。拓次は十七歳の



詩人 大手拓次

時、病氣をし、それがきつかけで詩人として立つ希望を抱き、また男女を問わず人を激しく恋うる気持ちを知るようになる。早稲田に入り、はじめは英国の詩人の作を読むが満足せず、まだ覚束ない語学力でボードレールを読み、今までにない喜びを覚える。それは「軽くあをい空にとぶやうに新しい心持」だった。その気分の高まるうちに、拓次自身の詩が溢れるように生まれて来た。

(いじまこういち・詩人)

大手拓次（おおてたくじ）

1887年（明治20）～1934年（昭和9）。

詩人。現安中市磯部生まれ。

- ・北原白秋に師事。萩原朔太郎、室生犀星とともに「白秋門下の三羽鳥」と呼ばれた。
- ・色彩感覚に富んだ幻想的な象徴詩を書き、耽美的な詩風を築く。
- ・死後の昭和11年に詩集『藍色の墓』が出版され、その業績が評価された。

来館者の声

- ・ここにきてはなみずをすったら、しいたけのあじがしました。
- ・今日はいつもよりつらい一日だった。そんでここ土屋文明にきたん。ここいいとこや。またきまっせ。
- ・思いがかなってのはるばる四国から来ました。展示のわずかに感動、方竹の庭のひとつひとつの木に手で触れて土屋先生を偲びました。
- ・文明さんが万葉のゆかりの地を広く訪ねているのにびっくりした。
- ・土屋文明を通して多くの歌人・文学者の世界に触れることができた。
- ・文明が百まで生きたということはすごいことだ。苦勞をしているが苦勞を感じさせない写真の顔つきに心が穏やかになります。
- ・息子の夏休みの宿題のために来ました。はじめてきたのですが、落ち着いた空間にほっとしています。ステキな場所を発見。うれしくなりました。また来ます。
- ・子どものよみもの原画展「みんなおいでよ絵本のくにへ」に何と今日は4度目の来館です。たくさんの友人を誘っての来館。人形劇団「みつばち」の公演も見せていただくことができ大満足です。「みつばち」の皆さん、今まで、本当にお疲れさまでした。
- ・絵本絵画展を拝見いたしました。阿部はじめさんのコーナーが気に入り、中でも「かげろう」と「しあわせの木」が良かったです。子どもができたら見せてあげたい・・・けれど、大人になってから読んだ方が考えさせられ、その深さが身にしみ入るのかも知れません。
- ・なんだか難しそうなので敬遠していたのですが、実際は説明してくれるボランティアさんとかがいてすごくわかりやすかったです。いろいろ親切にして教えてもらってうれしかったから、今度はおばあちゃんも連れて来ようと思います。
- ・庭の出入口がめだたない。書齋の近くに作った方が、実感がある気がする。
- ・短歌や文明の人柄等に気楽に近づける展示の仕方を研究してほしい。一部の愛好者だけでなく、みんなが少しずつ興味が持てるようになるために。
- ・資料を少し増やしてほしい。
- ・はば広い年齢にうける企画やいろんな人の興味をひくようなことをして、入りやすく、利用しやすくしてほしい。

宮崎の若山牧水賞



伊藤一彦

以前から行きたいと思っていた「土屋文明記念文学館」を初めて訪ねた。宮崎から東京まで飛行機で行き、それから上越新幹線で高崎まで行ってあとはタクシーを利用した。企画展「佐藤緑葉と伴に―若山牧水・白石実三・田中辰雄」の開かれていた昨年六月のことである。静かで落ちついた佇まいの文学館の企画展は、豊富な資料が工夫して展示され、見応えのある内容だった。若山牧水を研究している私にとっては佐藤緑葉は重要な関心のある人物で、緑葉著『若山牧水』も読んでいたのだが、あまり詳しく知っているわけではなかった。しかし、今回の展示で緑葉について多くのことを知ることができた。

ところで、私の住む宮崎には県立の文学館がない。若山牧水のふるさとの宮崎県東郷町坪谷に牧水記念館はあるのだが、県立文学館はまだない。

将来ぜひ生まれたいものと思っている。もし宮崎に文学館が誕生したらきつと牧水が展示の中心になるであろう。また、そうなるべきである。牧水はもともとと顕彰されてよい歌人だ。

文学館はないが、宮崎県には若山牧水賞がある。宮崎県、東郷町、延岡市、宮崎日日新聞社が主催し、一年間の中で最も優れた歌集に賞を贈っている。人間と自然に純粹で豊かな愛情を寄せた牧水を顕彰し、短歌の発展に寄与するのが目的である。選考委員は大岡信氏、岡野弘彦氏、馬場あき子氏、それに私である。これまでの受賞者は高野公彦氏、佐佐木幸綱氏、永田和宏氏、福島泰樹氏。そして、第五回目となった今年の受賞者は歌集『本所両国』の小高賢氏と歌集『希望』の小島ゆかり氏だった。

身をまかせ流れたのしめ結論を追わぬ生
き方鴨を見習え
小高 賢

吸殻は雑兵に似て道端にくの字への字に
ひらたくのびる

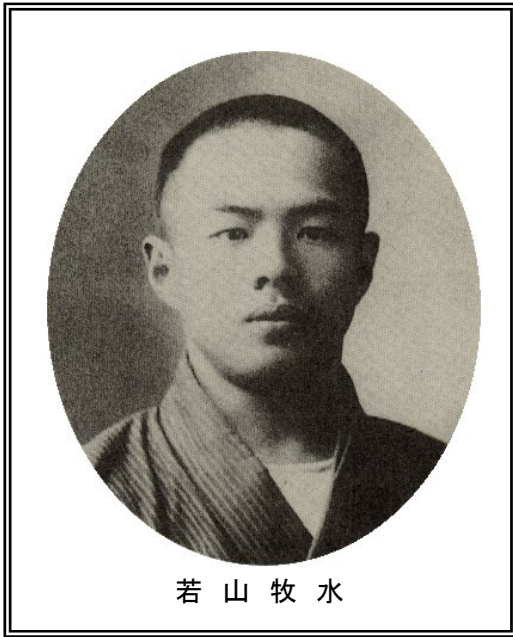
月ひと夜ふた夜満ちつつ厨房にむりッむ
りッとたまねぎ芽吹く
小島ゆかり

希望ありかかつては虹を待つ空にいまはそ
の虹消えたる空に

ともに表現は平明で、分かりやすい。そして、

深い人間性を感じさせる抒情は温かみをもって私達の心にしみこむ。小高作品について馬場あき子氏は「人生を重く受け止めながら軽く歌っているが、その背後を読むと、現代の先端的な生き方につながる人間性が出ている」と評し、小島作品について大岡信氏は「歌人としては、若い四十四歳の女性でエネルギーが体に満ちあふれている。彼女の年代らしい歌が素直に、すんなり口について出てくるように、つづられている。面白い言葉遣いの歌が多い」と評した。

第五回を迎えた今年の若山牧水賞は、「全国子ども短歌コンクール」も行った。全国の小学生、中学生、高校生から作品を募集したのである。牧水は子どもを心から愛した人だった。いや、牧水は一生子どもの心を持ち続けた人だった。自分の雑誌に早くから子ども投稿欄を設けたのも牧水だった。その意味で牧水賞に子ども短歌コンクールはふさわしい。まして現在には子ども達が心の居場所を持ちにくく、そのぶん表現せざるにいられないものを抱えている時代である。多くの作品が集まることを期待したところ、全国から約八千首が寄せられた。選者はやはり大岡、岡野、馬場氏に私。心に残るいい作品に出会えた。小・中・高、それぞれ百首が入選となり、『若竹百人一首』の本が作られた。「若竹」の名は牧水に「若竹の伸びゆく」と子ども等よ真直ぐにのばせ身をたましひを」の作があるからである。入賞作品の一部を紹介しておこう。



若山牧水

カレンダー誕生日には花マルだだって全
てはそこからだから

秋田市 小六年 土田 聡子

うまそうな肉のそばには人だかりとなり
でひとり焦げてゆくナス

裾野市 中一年 高瀬 由貴

消しゴムはいろいろ消せて便利が見え
ないものは消えてくれない

小林市 高一年 黒木 雄二

(いとうかずひこ・歌人)

第9回企画展「佐藤緑葉と伴にー若山牧水・白石実三・田中辰雄」アンケートから

- ・佐藤緑葉を中心に人脈と歴史が整理されていて、勉強になりました。
- ・佐藤緑葉については名前程度しか存じておりませんでした。困む人々との関係などから人となりがよくわかり、親しみが湧きました。
- ・大学時代近代詩をとっていましたが、佐藤緑葉のことはあまり知りませんでした。手紙など数多く残っているのとか、教務手帳やら、講義ノートにこと細かく書かれているのをみると、その人柄と性格がしのばれるように思います。ここに来てよかったです。
- ・亡き主人から緑葉の偉大さを聞かされ、この度、生家の方に同伴して来館し、心底文化人の偉業に敬服しました。
- ・伯父であった緑葉とは、父と母の葬儀の写真を二枚一緒に撮っていますが、それ以外まったく会う機会がありませんでした。今回の企画展で、私の知らない種々の点を詳細にわたり、知ることができました。
- ・若山牧水の「上州の旅」全八行程略図を見て、自分の行ったことのある旅館に牧水も行ったことを知り、ビックリし、うれしくおもった。
- ・以前から牧水の歌が好きで、歌集を読んだり、暮坂峠には何回も散策しておりますが、改めて貴重な記録に接し、ただ懐かしく嬉しく拝見しました。
- ・牧水の酒を友とし、人生を謳歌したその頃がしのばれ、感無量でした。
- ・本人の自筆の日記、手紙、詩、歌などが見られて実感が湧く。Eメールの字とは違い、筆という肉感が、心と心のつながりを深めていくように思える。今の電腦時代とは、ちがったやわらいだやすらぎを感じる。
- ・格調の高い毛筆の文字に在りし日の歌人を偲ばせられ、しばらくその前に留まりました。
- ・牧水は大好きです。緑葉も実三も辰雄もすばらしいと思った。
- ・たくさんの葉書が展示されていて、肉声を聞く思いでした。
- ・知らなかった文学者を身近に認識できて良かったです。
- ・！マークが工夫されていて、よいと思いました。知識のない人でもポイントがわかって、とてもいいアドバイスになると思います。
- ・まだ人に知られていない県内の歌人をどんどん発掘して、県内外に知らしめてほしい。

「世界俳句フェスティバル二〇〇〇」 出展記

田口信孝

一九〇〇年の夏目漱石は、船旅約五〇日、船酔いに苦しみ、各所に寄港しながら、ロンドンに降り立ちました。二〇〇〇年の我々(本多・田口)は、飛行機直行一三時間で、ロンドン・ヒースロー空港に立っていました。

私は、昨年四月に高校教員から土屋文明記念文学館に転勤してきて、イギリス出展の担当になりました。準備も慌ただしく、出発の日、八月十三日を迎えました。飛行機の中では、漱石の英国留学前の高ぶりに比するべくもありませんが、これから始まる「世界俳句フェスティバル二〇〇〇」を前に緊張と不安で一杯でした。

「世界俳句フェスティバル二〇〇〇」とは、「二一世紀の俳句―人々の心を俳句で結ぶ」をスローガンとして、二〇〇〇年八月十五日から三〇日まで、イギリス(ロンドン・オックスフォード)にて開催された俳句の世界大会のことです。

土屋文明記念文学館では、昨年二月に開催した「二〇〇〇年百人一句」展の中から、二〇句を英訳し、カリグラフィ―(英字書道)パネル化した俳句作品を、この大会のロンドン会場大和日英基金ジャパンハウスで展示し、世界にむけて、日本の現代の俳句を紹介しました。

大和日英基金は、日英の架け橋として文化的な

交流に貢献している財団です。そのロンドン支部であるジャパンハウスは、シャーロック・ホームズで有名なベーカー街二一番地にほど近い所であり、ロンドン在の日本人や、親日イギリス人に、大変に有効に利用されている施設です。各種展覧会や、講演会を随時行っています。入るのに少し勇気がいりますが、日英関係書籍の図書室や、日本関係のパネルト配布、邦字新聞の閲覧も可能ながりたい施設です。

八月十四日、我々のロンドンでの最初の仕事は、ジャパンハウスの一室に英訳俳句カリグラフィ―パネル二〇枚と解説パネル五枚を並べることでした。

英訳して展示した二〇句は、「二〇〇〇年百人一句」の選者である夏石番矢氏(俳人・明治大学教授)が選定した次の句です。

むかしむかしへいろいろの蝶飛ばし居り

阿部完市

未来より滝を吹き割る風来たる

夏石番矢

われ亡くて山べのさくら咲きにけり

森 澄雄

人はやがて銀河に梯子掛けてしまう

吉田透思朗

老父ふと鳥の如くに空を見ぬ 鳴戸奈菜

ほうれんそう
菠稜草スープよ煮えよ子よ癒えよ

西村和子

涙なし蝶かんかんと触れ合いて 金子兜太

サイネリア待つといふこときらきらす

鎌倉佐弓

やはらかき身を月光のなかに容れ

桂 信子

初釜や友孕みわれ瀆れあて 八木三日

女

鈴に入る玉こそよけれ春のくれ 三橋 敏雄

春野ゆく連れの一人は老狐なり 水野真由美

黄泉に来てまだ髪梳くは寂しけれ

中村苑子

クレヨンの黄を麦秋のために折る

林 桂

夏の夕べオルガンの鳴るながい街

津沢マサ子

秋の入水眼球に若き魚ささり

被爆せし身にて戦前戦後なし 相原左義長

昼しんかんと悪をみせる大孔雀 安井浩司

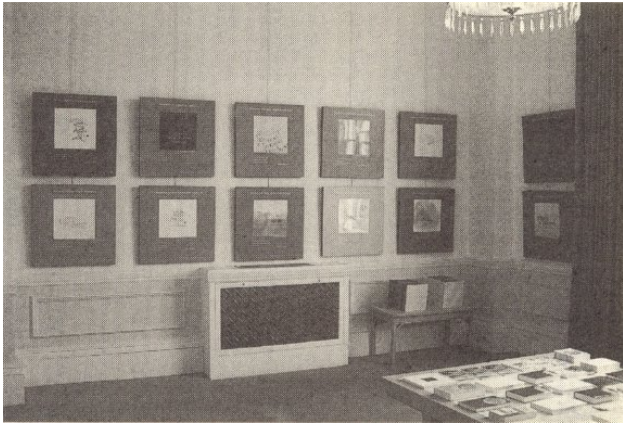
寝て小さき子よ河原のてんとう虫

寺井谷子

父恋ひの色の嘖き出すかきつばた

八月十五日にいよいよ「世界俳句フェスティバル二〇〇〇」の展覧会の部が開会しました。その日の夕刻五時から内覧会を兼ねたパーティーがあり、俳句の朗読や、琴の演奏などもあり、和やかなスタートでした。この日だけで五〇名以上の方に作品を観覧していただきました。会期中では通算三〇〇名を越えるイギリスの方々などに作品を鑑賞していただきました。

現在日本で活躍中の俳人（中村苑子氏は今年一月御逝去）を紹介した、今回のような当館の取り組みは、大変に有意義なことであったとの評価を、大会主宰者の瀧口進氏をはじめ、大会に参加した多くの海外俳人から得ることができました。



現在、海外の俳人の多くは、俳句の解説書として、広く読まれているブライスの俳句研究書などで英訳紹介された芭蕉や一茶といった古典俳句の知識は豊富です。しかし、近現代、特に戦後の日本俳句の翻訳されたものが、海外では少ないこともあり、現在の日本の俳句の状況を知る機会が少ないようです。

当館では、英訳俳句カリグラフィの展示と共に、「二〇〇〇年百人一句」の英訳図録も展示いたしました。海外の俳人より、この本とカリグラフィ作品によって現代日本の俳句の状況を初めて深く知ることができたとの、高い評価をいただくことができました。

我々は、本大会の始まる八月二五日までは、来館者への展示解説や、他の大会出展作品の調査をすすめる一方で、土日は閉館となったので、ロンドン市内を見てまわりました。

私は、主に夏目漱石ゆかりの地を見て参りました。ロンドン大学周辺と大英博物館、その周辺の古本屋、倫敦塔とタワーブリッジ、漱石五回目の下宿と真向かいに位置する倫敦漱石博物館、ベーカー街のクレイグ先生の家など、うろろろする時間のほうが長かったです。忘れることのできない時間となっています。特に、貴重な漱石関係の資料を展示している倫敦漱石博物館長の恒松郁生民から、バイタリティーあふれるお話を伺えたことはこちらにもパワーをいただいたようで有意

八月二五日からは、「世界俳句フェスティバル二〇〇〇」の本大会が開会し、その夜は駐英日本大使館で大会主宰の瀧口氏や林駐英大使の挨拶、「世界俳句コンクール」各賞発表など、華々しく歓迎レセプションが開かれました。

大会は、二〇か国、九〇名以上の参加者があり、六日間にわたり、「二二世紀の俳句」について、全て英語で、三〇以上の研究発表や、各種会議・討論会、吟行句会、連夜の懇親会等が行われ、大変な盛り上がりの中にすんでまいりました。

日本の文化である俳句が、こんなにも海外の詩人たちに愛され、作られていることに強い衝撃を受けました。俳句の持つ、個人の感情の発露の器としての優れた特性と、他者へのメッセージ性の強さが、俳句を世界の詩へと押し上げていくと思えました。日本では結社・同人誌を通して、俳句は国民文学となつていると思えますが、海外ではインターネットが、そのかわりとなり得ているようです。

今後は、インターネット等の情報通信機器の発達によって、国境の垣根がますます低くなると予測されますが、日本の現代の姿を正しく知ってもらう努力が、より一層重要になると感じました。大会中、二人の日本人女子留学生の協力を得て、海外俳人に対して、当館で行う招致展のために、写真撮影、色紙の揮毫や句集の寄贈依頼、群馬での展示承諾書の取り交わし、研究発表のレポート

等を行いました。魅力的な女性たちが通訳だったこともあり、最も心配された海外俳人との交渉も、何とか無事に終えることができました。

ロンドンでもオックスフォードでも、日本人観光客や、日本人留学生があふれかえっていました。特に、日本人女性は颯爽とロンドンの街を闊歩しているように感じました。大和ジャパンハウスの責任者河村さんや、ミキトラベルの添乗員の方（写真が本業とのこと）、そして、我々に協力してくれた二人の女性など、みんな輝いて仕事や勉強に取り組んでいました。彼女らを漱石が見たら、どのような感想をもらすでしょうか。

「狼の中のむく犬」と西洋人の中の自分を意識した漱石のコンプレックスは、現代では解消されたのでしょうか。漱石はロンドンでもお金の心配ばかりしていました。当時、円は全く弱小貨幣でした。そのため漱石は大学の本科生になることをあきらめ、クレイグ先生の個人授業と洋書の購入と乱読によって、「国家」の期待に応えようとしていました。

現在のロンドンでは、朝一番のテレビニュースでドル・ユーロ・ポンドと並べて円の為替相場が流されています。あふれかえる日本人留学生たちは、軽やかに個人の目的の成就に邁進しているように見えました。群馬の学校の中で、一生のこれからの大部分を過ごしていこうと考えていた私のようなものにも、この百年の変化の意味について大いに考えさせられたロンドン出展でした。



明治中頃、三四郎は、熊本から汽車で二日かけて東京に出て参りましたが、我々は、八月三〇日朝、オックスフォードを出発し、八月三十一日お昼頃には、群馬に戻って参りました。我々は、三四郎が上京して感じた迷いを、世界を舞台に迷おうとしているのかもしれない。

イギリス出展に際して、瀧口進氏、夏石番矢氏をはじめ、多くの方々に、ご指導・ご支援いただきましたことに、深い感謝の念を表しまして、終わりとさせていただきます。

（たぐちのぶたか・学芸課）

第10回企画展

「世界俳句フェスティバル2000招致展」アンケートから

- ・俳句がこんなに世界中に広まっていることに驚きました。日本の文化を大切にしたい。
- ・外国で書道の講座を持ったことがありますが、そこにはHaikuの授業もあり、外国の方が先生で驚いた記憶があります。すでにHaikuは英語になっていました。
- ・愛媛県生れなので俳句と共に育ちました。気が付いたら教師も兄弟も友人も俳句を詠んでいました。その俳句が世界の方々の生活と共にあるということに深い感銘を受けました。
- ・インターネット俳句の展示が印象に残った。
- ・カリグラフィーによる俳句作品が素晴らしかった。また、新しさを感じた。
- ・子どもの俳句のところがよかった。カナダの子が作ったのがよかった。
- ・イオン・コードレスクの俳句と絵入り本がほしいですね。
- ・中学3年生の英語の教科書で、英語で書く俳句の項があります。中学生たちに見学する機会を与えてやりたかったと思います。
- ・最近俳句の会に入会し、自分の生活を生き生きとおおらかに、それでいて研ぎ澄ませられたらと思っています。この企画は私にとっては素晴らしい出会いでした。
- ・絵画と俳句の組み合わせを実際の作品で見てなるほどと思いました。
- ・どこが五・七・五なんだろうかと不思議に思ったが、上手なのでびっくりした。
- ・英語の俳句もチョット目には面白いが、やはり、俳句、短歌、漢詩等は、横文字文化には無理があると思う。
- ・文章の展示が多いので、もう少し照明を明るくして欲しい。
- ・交通機関が不便なのが残念です。